

朝鮮飯場

日野善太郎

ひどい大阪弁

平山飯場が朝鮮飯場であるということに気がついたのは、入ってから何日もたってからでした。

何日もたってようやく気がついて

「あっ」

と思つたのです。

この「あっ」は少々複雑です。

朝鮮人は一目で判ると思つていたのに、何日も同じ屋根の下に寝起きしながら気づかなかつたそのことが私の心の中でいろんな思いを一時にさそひ、その複雑さが、それだけ多くの言葉にはなり切れず、ただ、

「あっ」

と、なつてしまつたのです。

私たち日本人の目からは、西洋人はどれも同じに見

えます。

少くとも、その人がイギリス人か、フランス人か、イタリー人か、一目では判りかねます。

西洋人同士ではしかし、そんなことはないようです。

同じように、西洋人から見れば東洋人というのも、中国人、朝鮮人、日本人の区別が、一目ではつきかねるようです。

そしてまた、東洋人同士では、これがわりと見分けがつくのです。

特に、日本人の目からは、朝鮮人は一目で判つてしまします。

顔つき、歩き方など独特なものがあつて、間違えつこないのです。

かりに一目で判らない場合でも、少しつきあえば判ります。

でした。

今から思えば、松本親方も、その兄弟も、妹むこも、いかにも朝鮮人らしい顔つきをしていたと思ひ当ります。それなのに、なぜ、気づかなかつたのか、思い返してみると、そこにはそれなりの理由がありました。

新米のベエベエだった私は、松本一族の親方たちと、口をきく機会も、顔をあわせる機会もすくなかつたのです。

だから、初めの何日間かのうら、ひよつとしたら、と思つても、はつきりたしかめられなかつたのでした。

松本一族の中で、いちばん口をきく機会が多かつたのは、松本親方の妹の平山姐御でした。

この姐御の日本語に、私はすっかりだまされてしまつたのです。

ひどい大阪弁でした。

ひどい、というのは、下手という意味ではありません。下品で乱暴という意味です。

「何してけつかんねん」

「ワレ、しばきあげんど」

「早よ、めし食わんかい」

——と、まあこんな具合です。

どこの飯場の姐御も、自分の所の若い衆を呼びつけに

彼らが食生活に常用(あるいは多用)しているニンニクが原因の体臭(または口臭)がそうです。

それからまた、朝鮮語と日本語の発音の基本的な違いからくる言葉なまりがそうです。

朝鮮人は日本にどれほど長く住んでも、どうしても同化できないのではないかと思つたほどです。

それは見事と言つていいでしょう。

なぜなら、彼らは明治以来、長い間、この日本の植民地とされ、服従を強いられてきたのです。同化しないことが、一つの抵抗だつたと言つても、的はずれではないのではないのでしょうか。

私が子供のころ、近所の遊び友だちにも、小学校の同級生にも、朝鮮人はたくさんいました。

成人してからも、友人や、一寸した知り合いがいました。そういうつきあひの経験からいっても、私は、朝鮮人はすぐ見分けがつくと自信をもっていました。

むろん、このことは、植民地がどこの、民族差別がどこの、などという小むづかしい話とは関係ありません。

ごく単純に

(朝鮮人と日本人は、すぐ見わけられる)

という思いこみが私にあったのです。

私は自分の思いこみを訂正しないわけにはいきません

はしません。

「だれだれ」さん、

と、さんづけをします。それが女らしい言葉づかいというものでしょう。

ところが平山姐とは

「前田ッ」

「松浦ッ」

「日野ッ」

と、呼びつけなのです。男でもこうは乱暴な口はきけないと思うくらい、勇ましくも、ぞんざいな口のきき方です。

こんな大阪弁を、自由に使える人間は、どう考えても他所者ではありません。

生まれながら、その土地にしがみついて生きてきた人間でなければ、できない相談ではないでしょうか。

たとえば、かくいう私は、関東生まれの九州育ちです。で、東京弁と九州弁とがチャンポンになっているところがあります。

しかし、喧嘩にったりして、タンカを切るとなると、九州弁で悪口雑言はいえないのです。やはり、生まれた土地の言葉が出てしまいます。

「てやんでえオタンコナス、べらんめえ」

パンモグラ

平山飯場に入って、何日目かの朝です。

朝といっても、まだ六時にはなっていないません。飯場の朝は早いのです。

そして、それは十一月頃だったような気がしますから、まだ暗いのです。世間はまだ目がさめていない時間です。その静かな空気を、土足で蹴破るような大音声が、突然ひびき渡って目がさめました。

「ゴハン、メシ、イタダク、パンモグラ」

近所迷惑?

そんなことは一切お構いなし、この世に何の心配ともなほような陽気な大声の主は、平山親方でした。

寝ぼけた頭から、眠りの霧のようなものが次第に吹き抜けて、何ごとかと飛び上った口がおさまると、私は

「ちえッ」

と舌打ちしました。

はじめは何を言っているのかわからなかった大声の意味も、ようやくわかってきました。

「早く起きろ、めしを食え」

と言っているのです。

てなもんです。

大人になってからおぼえた言葉では、なかなか喧嘩はできません。

まったく平山姐どの言葉使いときたら、日常の会話でさえ、喧嘩腰のように乱暴でした。

ひどい大阪弁でした。

私のような、他所から流れて来た人間の目をみはらせるような大阪弁でした。

だから、

(ひどい大阪弁)

というのは、下手な大阪弁という意味ではなく、下品で乱暴ではあっても、上手な大阪弁ということになります。

上手とか、下手とかというよりも、生まれながら身についた言葉というべきでしょう。

そんな大阪弁をまくしたてる姐ごを、朝鮮人とは思えなかった、といっても無理はないでしょう。

平山姐どが日本人なら、その実の兄である松本親方も日本人、だから松本一族は日本人と考えて当然でしょう。いや、日本人とか、朝鮮人とか、そんなことを考えさえしなかったのです。

そんなに大声を出さなくても――

平山親方の、それこそ破れ鐘のような大声は、飯場の仲間たちだけでなく、近所の人たちまで、ついでに起してしまつたに違いないのです。

何たる非常識、

何という夫婦、

そもそも、姐どの乱暴な言葉づかいだけでも少々頭にきていたのです。

そこへまた、

この朝っぱらからの、近所迷惑を考えぬ大声です。

大体、尼崎市道意町というところは、住宅地と工場街とが入り組んでいる所です。

平山飯場の近所に住んでいる人たちは、尼崎製鉄、久保田、日新、古河などの工員さんが多いのです。当然、夜勤の人もあるわけだし、昨夜、残業でおそかった人もいるにちがいありません。

そういう町の夜も明け切らぬ時間に、山奥の一軒家じやあるまいし、空気も破れるようなドラ声を出さなくても――

(ふざけてやがる)

と、思ったのは、しかし、声の大きさだけではありません。

「ゴハン、イタダク」

という、まるで朝鮮人か、中国人が、なれぬ片言で口をきくような、その起し方です。

子どものころ、友だちが朝鮮人の口真似をしてからかうのをきいて、腹を立てたことを思い出しました。

「チョーセン、チョーセン、バカニスルナ、ヒヤメシクテモヌクイクソタレル、コレニホンチン、チョーセンチン、ミナオナシ」

それと同じことを平山親方がやっているのだと思いました。

朝っぱらから何たること。

一番下等な、一番卑劣な、大嫌いな——。

まったく朝から不愉快な——。

そう思いながらも身支度して、食堂へ出ますと、平山

親方はえびす顔でした。

「メシ、コハン、イタダク、ハヤク、アッハッハ、パンモグライ」

なのです。

そのとき、はっと気づきました。

もしかしたら、平山親方は朝鮮人の真似をしているのではなくて、ホンモノの朝鮮人だったのではないか。

そう思っただけで直すと、どこがどうというわけではないのに、平山親方の顔の中に、ハッキリ朝鮮人特有の顔つきを発見しました。

そうだったのか。

それならユリもない。

しかし——

だとすると、平山親方は朝鮮人で、ヨメさんは日本人なのか。朝鮮人の男と、日本人の女の結婚、格別珍しがる話ではない。

もう一度、親方の顔を見ました。飯場の気ぜわしい朝めしを、かつこみながらです。姐ごの顔も改めて、盗み見しました。

それにしても、この二人の結びつきにはどんな事情があったのだろうか、と、それこそいらぬセンサクみたいなのことも考えました。

そして、それはいつのまにか、ひょっとすると、という思いにつながりました。そういえば、姐ごの顔の中にだって、朝鮮人らしさの面影があるじゃないか。

しかし——

と、また私の思いは、そこでもつれた糸をたぐるように別の方へ手をつけるのです。

もしれません。

それなら、今、目の前にいる平山姐ごが、どことなく朝鮮人に似ていても、だから朝鮮人と決めてしまうのは早合点かもしれません。

ま、飯場の親方が、朝鮮人だろうと、日本人だろうと、どっちだって大したことはないのです。——と、今の私なら思います。

だが、そのときの私は、何となくそれをはっきりさせたかったのです。

その日の昼休みに、仲間にそれとなくききました。

仲間の返事は明快でした。

「松本一族はみな朝鮮人や」

その返事を聞いて

「アッ」

と思ったのです。

半分は予期していたのですから、ビックリ迎天というほどの驚きではなかったのですけど、「アッ」と思ったのは事実です。

「アッ」と思ったのは、（今まで朝鮮人は一目で判ると思っていたのに、今度はかりは判らなかつた）このことです。

しかし、それだけではありません。

朝鮮人と日本人は血のつながった兄弟民族といえるか